

んし、御みみをかたふけて、わか名を称する物やあると、よるひるき
 こしめさるる也。されは一称も一念も阿弥陀にしられまいらせすとい
 ふ事なし。されは撰取の光明はわか身をすて給ふ事なく、臨終の来迎
 はむなしき事なき也。この文は四十八願のまなこ也。肝なり、神也。
 四十八字にむすひたる事は、このゆへ也（『昭法全』五八八頁）と述
 べて、最も肝要なごとと位置付けている。

(27) 『念仏往生要義抄』（『昭法全』六八七頁）

(28) 『東大寺十問答』（『昭法全』六四六頁）

(29) 「大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす御返事」（『昭法全』五一〇
 一五一頁）

(30) 『三部経大意』（『昭法全』三一一―三三二頁）

(31) 『選択集』第十六章（土川本一二四頁）

この小論作成に当って、香川孝雄教授の「仏教における光明思想の展開」
 および高橋弘次教授の『法然浄土教の諸問題』所収の光明に関する論考に
 よるところ大であったことを付記しておく。

切二候。ヨクヨクマフシタマフヘシ」とある。(『昭法全』五一〇―五
一一頁)

- (16) 『逆修説法』初七日(『昭法全』一三五頁)、同様のことは『三部經
大意』で「此光明化仏菩薩マシマシテ、コノ人ヲ撰護シテ、百重千重
圍繞シ給ニ、信心彌ヨ増上シ、衆苦悉消滅ス。臨終ノ時ニハ仏ケ自來
テ迎給ニ、諸ノ邪業繫ヨク得ル者ナシ。是ハ衆生ノ命終ル時ニ臨テ、
百苦來リ追テ、身心ヤスキ事ナク、惡縁外ニヒキ、妄念内ニモヨオシ
テ、境界、自体、當生ノ三種ノ愛心キライ起リ、第六天ノ魔王此時ニ
当リテ、威勢ヲ起テ妨ヲナス。如此種々ノ礙ヲ除カ為ニ、シカシ臨終
ノ時ニミツカラ菩薩聖衆圍繞シテ、其人ノ前ニ現セムト云願ヲ建テ給
ヘリ。第十九ノ願是也。是ニヨリテ臨終ノ時ニイタレハ、仏來迎シ給
フ。行者是ヲ見テ、心ニ歡喜ヲナシテ、禪定ニ入カ如クニシテ、忽ニ
觀音ノ蓮臺ニ乘リテ、安養ノ宝刹ニ至ナリ。此等ノ益アルカ故ニ、念
仏衆生撰取不捨ト云ヘリ」とある(『昭法全』三二―三三頁)。これら
の説示は他にも多く見ることが出来る。

- (17) 『往生要集詮要』(『昭法全』七頁)、『往生要集略料簡』(『昭法全』
十六頁)、『往生要集釈』(『昭法全』二六頁)、『往生要集料簡』(『昭法
全』二一―二三頁)、『往生要集略料簡』(『昭法全』十六頁)、『往生要
集釈』(『昭法全』二五頁)
- (18) 『觀無量壽經釈』(『昭法全』一〇五頁)
- (19) 『選撰集』第三章(土川本三一―三二頁)
- (20) 『十二問答』(『昭法全』六三―六三三頁)
- (21) 『選撰集』第三章(土川本三一―三四頁)
- (22) 「耳四郎を教化したる御詞」(『昭法全』七七七頁)
- (23) 「十二箇條の問答」(『昭法全』六七四頁)
- (24) 『選撰集』第三章(土川本六〇頁)
- (25) 『一期物語』(『昭法全』四四七頁)
- (26) 『觀無量壽經釈』(『昭法全』一一〇―一一二頁)、同様の文が『選撰
集』第七章に「觀無量壽經云無量壽佛有八万四千相一々相各有八万四
千隨形好一々好復有八万四千光明一々光明遍照十方世界念仏衆生撰取

不捨。同經疏云從無量壽佛下至撰取不捨已來正明觀身別相光益有緣即
有其五。一明相多少、二明好多少、三明光多少、四明光照遠近、五明
光所及處偏蒙撰益。問曰備修衆行但能回向皆得往生何以仏光普照唯撰
念仏者有何意也。答曰此有三義、一明親縁衆生起行口常稱仏即聞之、
身常禮敬仏即見之、心常念仏即知之、衆生憶念者仏亦憶念衆生、
彼此三業不相捨離故名親縁也。二明近縁衆生願見仏即應念現在目前
故名近縁也。三明増上縁衆生稱念即除多劫罪命終時仏與聖衆自來迎接
諸邪業繫無能礙者故名増上縁也。自餘衆行雖名是善若比念仏者全非校
也。是故諸經中處處廣讚念仏功能如無量壽經四十八願中唯明專念弥陀
名号得生又如弥陀經中一日七日專念弥陀名号得生又十方恆沙諸仏證誠
不虛也。又此經定散文中唯標專念名号得生此例非一也。広顯念仏三昧
竟。觀念法門云、又如前身相等光一々遍照十方世界但有專念阿弥陀仏
衆生彼仏心光常照是非人撰護不捨總不論照撰余雜業行者
といひ、『觀經疏』および『觀念法門』を引き、私釈段で

私問曰仏光明唯照念仏者不照余行者何意乎。答曰解有二義、一者親縁
等三義如文、二者本願義謂余行非本願故不照撰之念仏是本願故照撰之
故、善導和尚六時禮讚云弥陀身色如金山相好光明照十方唯有念仏蒙光
撰。當知本願最為強、已上。又所引文中言自余衆善雖名是善若比念仏
者全非比較也者意云是約淨土門諸行而所比論也。念仏是既二百一十億
中所撰取妙行也。諸行是既二百一十億中所撰捨麁行也。故云全非校也。
又念仏是本願行諸行是非本願故云全非比較也(『選撰集』第七章(土
川本五六―六〇頁)と述べている。觀無量壽經釈の文は選撰集成立後
の後世の挿入と考えられるのであれば、この文を引く方がよいとも
考える。いずれにせよ選撰集の段階では選撰思想と称名勝行説によつ
て論じられている。また仏凡の關係について「示或人詞」に「善導和
尚の往生禮讚に、本願をひきていはく、若我成仏 十方衆生 称我名
号 下至十声 若不生者 不取正覺 彼佛今現在成仏當知 本誓重願
不虛 衆生称念必得往生 文。この文をつねに、くちにもとなへ、心
にもうかへ、眼にもあてて、弥陀の本願を決定成就して、極樂世界を
莊嚴したてて、御目を見まはして、わか名をとふる人があると御ら

けており、その光明は常に称名・本願と対応させているところにその特徴を見ることができるのである。

なお、この小論は平成十年度・日本印度学仏教学会での発表内容に補筆したものである。

注

- (1) 『徹選択集』巻上(『浄土宗全書』第七卷九五頁)
- (2) 「十二問答」(『昭和法然上人全集』(以下『昭法全』と略)六三五頁)
- (3) 「十二問答」(『昭法全』六三五頁)
- (4) 「禅勝房伝説の詞」(『昭法全』四六一頁)
- (5) 「禅勝房に示される御詞」(『昭法全』六九六頁)
- (6) 「三昧発得記」に「二月二十八日依病念仏延之。或一萬遍或二萬遍。左眼其後有光明放。又光端赤。又眼有瑠璃。其眼如瑠璃壺。……建仁二年二月二日高畑少将殿於持仏堂謁之其間如例修念仏。見阿弥陀仏之後、障子徹通仏面而現。大如長丈六仏面即忽隱給。二八日午時也。元久三年正月四日念仏之間、三尊現大身、又五日如前云々」(『昭法全』八六四―八六五頁)とある。
- (7) 『法然上人御夢想記』に「以為、何所ニ往生人ノアルソ哉。ココニ紫雲トヒキタリテ、ワカトコロニイタル。希有ノオモヒヲナストコロニ、スナハチ紫雲ノ中ヨリ、(無量ノ光ヲ出ス、光ノナカヨリ)孔雀鸚鵡等ノ衆鳥トヒイテテ、(ヨモニ散シ、又)河原ニ遊戯ス。沙ホリ濱戯、コレラノ鳥ヲミレハ、凡鳥ニアラス。身ヨリ光ヲハナチテ、照曜キハマリナシ。ソノノチトヒ昇テ、本ノコトク紫雲ノ中ニ入リ又」(『昭法全』八六一頁)とある。
- (8) 『御臨終日記』には「マタアル時、弟子トモニカタリテノタマハク、観音勢至菩薩聖衆マヘニ現シタマフオハ、ナムタチオカミタテマツルヤトノタマフニ、弟子等エミタテマツラスト申ケリ。・凡ソコノ十

餘年ヨリ、念仏ノ功ツモリテ、極楽ノアリサマヲミタテマツリ、仏菩薩ノ御スカタヲ、ツネニミマイラセタマヒケリ。シカリトイヘトモ、御意ハカリニシリテ、人ニカタリタマハス侍アヒタ、イキタマヘルホトハ、ヨノ人ユメユメシリ侍ス。オホカタ真身ノ仏ヲミタテマツリタマヒケルコト、ツネニソ侍ケル。マタ御弟子トモ、臨終ノレウノ御手ニ、・マタ同日(二二日)午時ハカリニ、アル御弟子申テイフヤウ、コノ上ニ紫雲タナヒケリ。聖人ノ往生ノ時、チカツカセタマヒテ侍カト申ケレハ、聖人ノタマハク、アハレナル事カナト、タヒタヒノタマヒテ、コレハ一切衆生ノタメニナトシメシテ、スナワチ誦シテノタマハク、光明遍照、十方世界、念仏衆生、撰取不捨ト三返トナヘタマヒケリ」(『昭法全』八七一―八七二頁)とある。

- (9) 『逆修説法』三七日(『昭法全』二四五―二四六頁)
- (10) 『三部經大意』(『昭法全』三〇頁)
- (11) 『三部經大意』(『昭法全』三二―三三頁)
- (12) 『三部經大意』(『昭法全』三一―三二頁)
- (13) 『逆修説法』三七日(『昭法全』二四六―二四七頁)
- (14) 『逆修説法』三七日(『昭法全』二四五―二四六頁)
- (15) 『逆修説法』三七日(『昭法全』二四六―二四七頁)、念仏の行者を照らして撰取することについて「大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはず御返事」に「マタ觀無量壽經ニハ、光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨トハ、コノ弥陀ノ光明念仏ノヒトヲノミテラシテ、餘ノ一切ノ行人オハテラサストイフナリ。ヨノ人ノイハク、タタシ餘行ナリトイフトモ、極楽ヲネカハムモノオハ佛ノ光明テラシテ、撰取シタマフヘキニ、ナンソタカナラスシモ、念仏ノ人ハカリヲテラシタマハムヤ。善導和尚ノノタマハク、弥陀真色如金山 相好光明照十方 唯有念仏蒙光撰 當知本願最為強 念仏ハコレ本願ノ行ナルカユヘニ、成仏ノ光明カヘテ本地ノ誓願ヲ信スル、眞信心ヲエタル信者ヲテラシタマフナリ。餘行ハマタ本願ニアラサルカユヘニ、弥陀ノ光明キラフテテラシタマハス。カルカユヘニイマ極楽ヲモトムル人ハ、本願ノ念仏ヲ行シテ撰取ノ光明ニテラサレムトオモフヘシ。コレニツケテモ念仏大

極楽ヲネカハムモノオハ仏ノ光明テラシテ、撰取シタマフヘキニ、ナンソタタカナラスシモ、念仏ノ人ハカリヲテラシタマハムヤ。善導和尚ノノタマハク、弥陀真色如金山 相好光明照十方 唯有念仏蒙光撰 當知本願最為強 念仏ハコレ本願ノ行ナルカユヘニ、成仏ノ光明カヘテ本地ノ誓願ヲ信スル、眞実信心ヲエタル信者ヲテラシタマフナリ。余行ハマタ本願ニアラサルカユヘニ、弥陀ノ光明キラフテテラシタマハス。カルカユヘニイマ極楽ヲモトムル人ハ、本願ノ念仏ヲ行シテ撰取ノ光明ニテラサレムトオモフヘシ。コレニツケテモ念仏大切ニ候。ヨクヨクマフシタマフヘシ⁽²⁹⁾と述べている。ここでは阿弥陀仏の光明を神通光の立場でとらえ、それを本願の行であるか否かにより光明撰取と関わらせて論じているのである。

四、おわりに

以上のことから知られるように、まず第一に、諸行と念仏行とを対比して念仏行の優れていることを阿弥陀仏の本願の聖意の勝劣・難易の上からとらえ、すべてに勝った称名をすべての衆生を平等に救い取ろうとする阿弥陀仏の願意・慈悲と受け止め、第二に、そのうえで本願行である念仏なるがゆえに阿弥陀仏は光明撰取するという立場を展開して、念仏行Ⅱ本願行Ⅱ阿弥陀仏による光明撰取Ⅱ往生という論理を展開している。この論理の中では光明の位置は本願と関わっており、それがゆえに往生を保証する働きとして重要な

立場を占めている。『三部経大意』では

次第十八願ニ、乃至十念若不生者不取正觉下立給ヘル。此ノ故ニヨリテ、釈迦如来此土ニシテ説給カコトク、十方ニ各恒河沙ノ仏マシマシテ、同是ヲシメシ給ヘルナリ。然ハ光明ノ縁ハ、遍ク十方世界ヲ照シテ漏事ナク、名号ノ因ハ悉ク十方無量諸仏、称揚シ給ヒテ、聞ヘスト云事ナシ。我至成仏道、名声超十方、究竟靡所聞、誓不成正觉下誓ヒ給ヒシ此故也。然ハ即光明ノ縁ト名号ノ因ト和合セハ、撰取不捨ノ益ヲ蒙ラム事不可疑⁽³⁰⁾

と述べて、第十八念仏往生の願を光明の縁と名号の因の和合によるものとしている。さらに第十三光明無量の願・第十九来迎引接の願とも対応させている。来迎引接は念仏者を光明に照らし出すことであり、臨終に正念に住せしめる働きであり、三愛を滅する働きでもある。このように見るとき、法然にあつては凡夫の報土への往生が課題であったことからして、阿弥陀仏の光明への関心は自らの実践ともなつて大きな意味をもつていたものと言わざるを得ないし、こうした光明観・念仏観に立つ故に「生まれつきのままに念仏すること」を説いたのである。

これらのことを総括的に論じて『選択集』第十六章では、八種選択の中

次観経中又有三選択、一選択撰取、二選択化讚、三選択付属、一選択撰取者観経之中雖説定散諸行弥陀光明唯照念仏衆生撰取不捨故、云選択撰取也⁽³¹⁾

と論じており、光明撰取を阿弥陀仏による選択であると位置付

生者、若人念仏阿弥陀仏無数化身化観世音化大勢至、常来至此行人之所。云々。念仏草庵雖少無数賢聖側塞、等靈鷲山苔庭、十萬億刹土不遠、如咫尺往来、一間方丈室不校如太虚宛満。若人不念仏者、恒沙聖衆一人不来、無数化仏一仏不来、作與仏極遠故光明不撰取、念仏者仏近行者身故光明撰取也。今日禪門禪尼同念同称之人、皆称仏近。云々。二臨終者、一切念仏行人、命欲終時仏来迎。九品行人、一人不空仏来迎。云々。欲預仏来迎、廢諸行修念仏。

三明増上縁。衆生称念即除多劫罪。命欲終時、仏與聖衆、自来迎接、諸邪業繫無能礙者。故名増上縁也。已上。自余衆行、雖名是善、若比念仏者、全非比較也。依此文、廢諸行可帰念仏。⁽²⁶⁾云々
阿弥陀仏と念仏の衆生との関係は身口意の三業がともに相関関係にあることを親縁で示し、念仏者の念に応じてその目前に現在することを近縁で明かしている。そして阿弥陀仏の目前に現在すること、すなわち平生に見仏し、臨終には来迎し光明撰取するとしている。また増上縁では称名による滅罪と来迎迎接とを説いて、諸行と念仏を対比して念仏の優れていることにあわせて念仏に帰すように勧めている。『念仏往生要義抄』には平生と臨終における光明による撰取の利益について

問ていはく、撰取の益をかうふる事は、平生か臨終か、いかむ。
答ていはく、平生の時なり。そのゆへは、往生の心ま事にて、わが身をうたがふ事なくて、来迎をまつ人は、これ三心具足しぬればかならず極楽にうまるといふ事は観経の説なり。かかる心ざし

ある人を、阿弥陀仏は八万四千の光明をはなちててらし給ふ也。平生の時てらしはじめて、最後まですて給はぬなり。かるがゆへに不捨の誓約と申候也⁽²⁷⁾

と述べ、平生の念仏相続と阿弥陀仏の来迎への信という三心具足の在り方が観無量寿経の立場であり、それにそうことによって阿弥陀仏は光明を放つて撰取して捨てることなしと説いている。この阿弥陀仏の光明は念仏するものを照らすといえども、あくまでも念仏の相続によつて不断に照らすものであることを

問。撰取の光明は、一度てらしては、いつも不退なると申人の候は、一定にて候か。答。この事おほきなるひか事也。念仏のゆへにこそてらすひかりの、念仏退転してのちは、なにものをたよりにててらすへきぞ。さやうにてあるならば、念仏一遍申さぬものおはある。されとも往生するものはすくなく、せざるものはおほき事、現證たれかうたかはん⁽²⁸⁾

と述べて、念仏相続と光明撰取と往生が対応させられている。以上の論述からも知られるように、阿弥陀仏の撰取の光明は本願と対応していることが知られる。本願行としての念仏行と諸行が優劣・難易で対比されかつ光明による撰取不撰取と対比されているのである。こうしたことを「大胡の太郎実秀が妻室のもとへつかはす御返事」には、善導の文を引いて、

マタ観無量寿経二八、光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨トハ、
コノ弥陀ノ光明念仏ノヒトヲノミテラシテ余ノ一切ノ行人オハテ
ラサストイフナリ。ヨノ人ノイハク、タタシ余行ナリトイフトモ、

救うためのものであり、それゆえに我が身の善し悪しによって往生の可否を論ずるべきではないとし

問ていはく、罪業をもけれども、智慧の燈をもちて煩惱のやみをはらふ事にて候なれば、かやうの愚癡の身には、つみをつくる事はかさなれとも、つくのふ事はなし。なにをもてこのつみをけすへしとおほえす候は又いかん。答ていはく、たた佛の御詞を信してうたかひなければ、佛の御ちからにて往生する也。さきのたとえのことく、ふねにのりぬれば、目しゐたる物も目あきたる物も、ともにゆくかことし。智慧のまなこある物も、佛を念せされは願力にかなはず、愚痴のやみふかきものも、ねんぶつすれば願力に乗する也。念仏する物をは、弥陀光明をはなちてつねにてらしてすて給はねは、悪縁にあはすして、かならず臨終に正念をえて往生するなり。さらにわか身の智慧のありなしによりて、往生の定不定をはさたむへからず。たた信心のふかかるへき也⁽²³⁾

と述べている。往生は阿弥陀仏の願力によるものであり衆生の器量の如何によるものでないこと、念仏者を等しく阿弥陀仏は光明を放ちて照らすかゆえに臨終に正念を得て往生することを説いている。

さらに本願の義について

二本願義、謂餘行非本願故不照撰之、念仏是本願故照撰之。故善導和尚六時礼讚云。弥陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念仏蒙光撰、當知本願最為強。已上。又所引文中言自餘衆行、雖名是善、若比念仏者、全非比較也者、意云、是約淨土門諸行而所比論也。念仏是既二百一十億中所選取妙行也。諸行是既二百一十億中

所選捨麁行也。故云全非比較也。又念仏是本願行、諸行是非本願故、全非比較也⁽²⁴⁾

と述べて、念仏行は法蔵菩薩が二百一十億という多くの諸行の中から選取した妙行であり、諸行は選捨された麁悪の行であつて、本願の行にあらざるものであるために全く比較の対象にならないものであるとしている。したがつて本願行である念仏行は諸行に比して勝行であるとして称名勝行説を展開している。本願行であるがゆえに、阿弥陀仏の光明を蒙ることができるとして、称名と本願と光明による撰取とを対応させている。また念仏行と諸行を比較して念仏行の勝ることは『一期物語』に

又云。聖道門諸行、皆修四乘因、得四乘果、故不及比較念仏。淨土門諸行者、是比較念仏之時非弥陀本願光明不撰取之、釈尊不付属。故云全非比較也⁽²⁵⁾

と述べ、本願と光明撰取、さらには釈尊の付属の行であるか否かを判断基準としている。そして阿弥陀仏と念仏行者との関係、すなわち仏凡の関係を三縁の義から次のように説いている。

三親縁等三義、善導和尚問曰。備修衆行、但能回向、皆得往生。

何以仏光普照、唯照念仏者、有何意哉。答曰。此有三義。一明親縁。衆生起行口常称仏、仏即聞之。身常禮敬仏、仏即見之、心常念仏、仏即知之、衆生憶念仏、仏亦憶念衆生。彼此三業不相捨離、故名親縁也。已上。衆生不念仏、仏與衆生遙疎也。

二明近縁。衆生願見仏、仏即應念現在目前、故名近縁也。云々。衆生不念仏、仏與衆生遙遠。付之有二意。一平生、二臨終、一平

後でも、十悪五逆の者であっても、一念十念に至るまで光明撰取るがゆえであるとしている。『観無量寿経釈』では続いてすべての衆生が平等に救われることについて、平等の義をあげて

一第九観光明遍照文、一光明遍照者、釈此文有三義、一平等義、二本願義、三親縁等義。抑弥陀光明、唯照念仏者計、不照餘行者何事哉。凡思道理、如来無縁慈悲光明、可照一切顯密行人、一切事理行者、何云念仏衆生撰取不捨、念仏行者外一切顯密行者、皆以不照撰取光明、可漏無縁慈悲、其條不審。誦八十六華嚴、讚事畢融之旨、觀純真法界理人、云何被選捨弥陀光明、道行勝無理趣金剛等受持法師般若畢竟空旨、談唯言無二法、何不蒙弥陀光明也。・・・最有所以哉。如此仏法修行之人、不論權實、不云顯密、撰取光明、光局唯念仏者、其故於經論博達之者照之、娑婆世界愚痴者多、智恵少、於事理深利者照之、鈍根者多、利根者少、於念仏法門者、智人修之、大聖文殊師利教念仏於法照。云々。愚人修之、照観無量寿經十悪軽罪破戒次罪五逆重罪者。或云教令念仏修念仏、或云但當應稱唱名号。凡聖賢愚利鈍貴賤同之、取要取思之、局智人愚人可漏、故今撰取光明照唯念仏者。云々

と述べている。何ゆえに阿弥陀仏の光明はただ念仏の者だけを照らしてその他の行者を照らさないのかの問いを設定し、それに答えて凡聖賢愚利鈍貴賤という面から見れば、凡は多く聖は少なく、愚かなる者は多く賢者は少なく、利根の者は少なく鈍根の者は多いという現実則し、かつ十悪軽罪破戒次罪五逆重罪の者までも阿弥陀仏の名号を称える者すべてを救わんとする阿弥陀仏の平等の慈悲（願

意）と受け止めている。このことは『選択集』において難易という観点から論じているところに通じる。すなわち『選択集』に

次難易義者、念仏易修諸行難修、是故往生礼讚云、問曰、何故不令作観直遣専称名字者有何意也。答曰、衆生障重境細心麁識神飛観難成就也。是以大聖悲憐直勸専称名字、正由称名易故相統即生。已上。又往生要集問曰、・・・故知、念仏易故通於一切、諸行難故不通諸機、然則為令一切衆生平等往生捨難取易為本願歟。若夫以造像起塔而為本願者貧窮困乏類定絶往生望、然富貴者少貧賤者甚多、若以智慧高才而為本願者、愚鈍下智者定往生望、然智慧者少愚癡者甚多、若以多聞多見而為本願者少聞少見輩定絶往生望、然多聞者少少聞者甚多、若持戒持律而為本願者、破戒無戒人定絶往生望、然持戒者少破戒者甚多、自余諸行准之応知。當知。以上諸行等而為本願者、得往生者少不往生者多、然則弥陀如来法蔵比丘之昔、被催平等慈悲普為撰於一切、不以造像起塔等諸行為往生本願、唯以称名念仏一行為其本願也⁽²¹⁾

とある。これらと同様の法語として「耳四郎を教化したる御詞」にただ本願にあひ、南無阿弥陀仏といふ名号をききえてむもの、若く不生者の誓のゆへに弥陀如来遍照の光明をもて、これを撰取して不捨、つみおもく、さはりふかく、心くらく、さとりすくなくならんにつけても、いよいよ仏の本願をあふぐべし。そのゆへは弥陀の本誓はもと凡夫のためにして、聖人のためにあらずといふ文によりてなり。あふぐへし、信ずべし⁽²²⁾

を見ることができる。念仏の一行を選択する理由はあらゆる人々を

不顛倒、即得往生阿弥陀仏極楽国土。令心不乱與心不顛倒、即令住正念之義也。

と説き、さらに続けて来迎は魔事対治のためであるとして

次為対治魔事来迎者、・・・何況凡夫具縛行者、設雖修往生業、不対治魔障難者、遂往生素懷難。然阿弥陀如来、被圍遶無數化仏菩薩聖衆、光明赫奕現行者前時、不能魔王是近此障碍之。然則来迎引接為対治魔障也。来迎義存略如斯。就此等義思同造仏像可造来迎之像也。仏功德大概如斯⁽¹⁶⁾と述べている。

三、阿弥陀仏の本願念仏行による光明攝取

『往生要集』の末疏には念仏行と諸行を阿弥陀仏の光明による攝取を対応させて

三攝取不攝取対者、諸行仏光明不攝取行也。念仏光明攝取行也。即文云亦不云仏光明 攝取余行人、是也。此又指上十文中觀經光明遍照文也⁽¹⁷⁾

と述べ、念仏の行者を攝取し余行の人を攝取しないことを觀無量寿經の真身觀の光明遍照の文を引いて論じている。ただしここでは本願との関係には言及していない。『觀無量寿經釈』では光明による攝益について

十三光明攝益者、經云。攝取不捨。是則前光明、攝取念仏衆生、一切而不捨名之為光明利益。念仏利益之義後可釈之⁽¹⁸⁾

と述べているが、『選択集』第三章では諸行を選択して第十八願の念仏往生行を選択するのは阿弥陀仏の本願によるからであるとし、その願意を難易・勝劣の二義をもって解釈し、名号に阿弥陀仏のすべての功德が撰在していることをもって勝であるとして、名号萬徳所帰論を次のように展開している。

問曰普約諸願選捨僉惡選取善妙其理可然何故第十八願選捨一切諸行唯偏選取念仏一行為往生本願乎。答曰聖意難測不能 解雖然今試以二義解之。一者勝劣義、二者難易義。初勝劣者念仏是勝餘行是劣。所以者何名号是萬徳之所帰也。然則弥陀一仏所有四智三身十力四無畏等一切内証功德相好光明説法利生等外用功德皆撰在阿弥陀仏名号之中故名号功德最為勝也。餘行不然、各守一隅是以為劣也⁽¹⁹⁾

一切の諸行に対して勝る念仏であるが故に萬行の中から名号を選択されたのが阿弥陀仏の願意であると解釈している。諸行に比して念仏の優れていることについては『十二問答』においても

抑淨土一宗ノ諸宗ニコエ、念仏一行ノ諸行ニ勝タルト云事ハ、萬機ヲ撰スル方ヲ云也。理觀菩提心讀誦大乘真言止觀等ハイツレモ佛法ノオロカニマシマスニハアラス、皆生死濟度ノ法ナレトモ、末代ニナリヌレハ力不及、行人ノ不法ナルニヨリテ機ハ及ハヌ也。時ライハハ末法萬年ノ後、人壽十歳ニ促リ、罪ライハハ十惡五逆ノ罪人也。老少男女ノ輩、一念十念ノタクヒニ至ルマテ、皆是撰取不捨ノ願ニコモレル也。故ニ諸宗ニコエ、諸行ニスクレタリトハ申也トソ仰ラレケル⁽²⁰⁾

とあり、念仏一行が諸行に勝っており、その理由として末法萬年の

を消滅させる特性をもっており、念仏を称えることは菩薩道の六波羅蜜を實踐することと何ら異なるものではなく、同様の功德が得られるとするのである。と同時に今のあるがままの状態にあつて人間にとつて最も根源的な煩惱である三毒煩惱を滅つすることになるのであり、ひいては罪の軽重をも問題としない立場へと展開していくものである。こうした光明観は名号の優れていることの表明であり、同時に名号には阿弥陀仏の功德のすべてが攝在するという名号萬徳所帰説への裏づけと見ることができものである。

そしてこの三光はいずれも阿弥陀仏の名号を称えることによつて照らし滅罪する働きをもつ阿弥陀仏固有の光明である。そのことを次神通光者、是釈迦如来欲説法華經之時照東方萬八千土者、則神通光也。阿弥陀仏神通光者、撰取不捨光明也。有念仏衆生之時照、無念仏衆生之時無照故也。善導和尚観經疏積此撰取光明下、云明光照遠近。是付念仏衆生居所遠近、撰取光明可有遠近之義也。設住一房中寄東居人念仏申撰取光明遠照、寄西居人念仏申光明近可照。以之準意得一城内、一国内、一閻浮提内、三千世界内、乃至他方各別世界如是可知。

と述べ、神通光は念仏する衆生を照らす光明であり、その念仏の衆生を撰取する光明である。あくまでも念仏する時にその衆生を照らして撰取するところに特質がある。さらに

然者付念仏衆生積有光照遠近事、殊被云事覚候。是則阿弥陀仏神通光也。諸仏功德何功德皆遍法界餘功德其相無顯事。但有光明正顯遍法界之相功德也。故諸功德中、以光明最勝積給也。又諸仏光

明中、弥陀如来光明猶勝給。是故教主釈尊讚曰。無量寿仏威神光明最尊第一諸仏光明不能及。云々。又云、我説無量寿仏光明威神巍巍殊妙昼夜一劫尚未能盡。云々。此是彼仏光明與餘仏光明相對、校量其勝劣、計不及彼仏之仏、昼夜一劫不可盡其数宜給也。得如是殊勝光事、則酬因位願行。謂彼仏法蔵比丘昔、於世自在王仏所、奉見二百一十億諸仏光明、選択思惟願言。設我得仏有光明有能限量、下至不照百千億那由他諸仏国者、不取正覚。云々⁽¹⁵⁾とあり、阿弥陀仏の光明の超勝性とその功德と本願との關係に言及している。

すでに清浄光・歡喜光・智慧光による三毒煩惱の滅罪について触れたが、その他の阿弥陀仏の光明による功德について見ることにする。念仏を称え極樂に往生しようとする衆生に対して阿弥陀仏は自ら念仏者の前に來迎することを第十九來迎引接の願として建てている。臨終に阿弥陀仏が來迎するのは、念仏行者をして臨終に正念に任せしめ、自体愛・当生愛・境界愛の三愛を滅し、さらに念仏行者を加持護念することを

然則深有往生極樂之志人、奉造來迎引接之形像、則可仰來迎引接之誓願者也。其來迎引接願者、即此四十八願中第十九願也。人師釈之有多義。先為臨終正念來迎。所謂疾苦逼身將欲死之時、必起境界自体当生三種愛心也。而阿弥陀如来放大光明現行者前時、未曾有事故歸敬心外無他念、而亡三種愛心更無起。且又仏近行者加持護念故也。称讚浄土經説慈悲加祐令心不乱。既捨命已、即得往生住不退転、阿弥陀經説阿弥陀仏與諸聖衆現在其前、是人終時心

る。この光明は「常（身）光」としてさらに詳しく説き明かされる。すなわち『逆修説法』に

大方彼仏光明功德之中、備如是義。細明者可有多種。大分有二。一常光、二神通光也。初常光者、諸仏常光各々隨意樂有遠近長短。或云常光面各一尋相、如釈迦仏常光是也。或照七尺、或照一里、或照一由旬、或照二三四五乃至百千由旬、或照一四天下、或照一仏世界、或照二仏三仏乃至百千仏世界。此阿弥陀仏常光、於八方上下無央數諸仏国土無所不照。八方上下付極樂指方角也。就此常光有異説。則平等覺經別指頭光、觀經惣云身光。異説往生要集勸之、可見。常光者長照不斷光也⁽¹³⁾

とあって、阿弥陀仏の身から発せられる光明であり、長照不斷の光明であるとしている。我々が自覚するとしなやかにかかわらず阿弥陀仏が常に照らしている光である。すなわち常に、我々に生かされ育ちまされていることに気づけるように照らし続けている光明である。このように阿弥陀仏の光明の超勝性が説かれるとともに、光明の功德について十二光仏の内の清浄光・歡喜光・智慧光と常光に対する神通光から説き示される。『逆修説法』に

次清浄光者、人師釈云。無貪善根所生光也。云々。貪有二、淫貪也。清浄者、非但除却汗穢不浄、断除其二貪也。貪名不浄故也。若約不淫戒不浄慳貪戒。然者法藏比丘昔不淫不慳貪所生光故、觸此光者滅貪欲之罪。若有人貪欲盛雖不得持不淫不貪戒、至心專念此阿弥陀仏名号者、即彼仏放無貪清浄之光照觸攝取故、除淫貪財貪之不浄、滅無戒破戒之罪、成無貪善根身、均持戒清浄人也。

次歡喜光者、此は無瞋善根所生光也、久持不瞋恚戒得此光故云無瞋所生光。觸此光者滅瞋恚罪。然者雖瞋增盛人、專修念仏者、以彼歡喜光攝取故、瞋恚罪滅同忍辱人。是亦如前清浄光滅貪欲罪。

次智慧光者、此は無癡善根所生光也。久修一切智慧、断盡愚癡之煩惱得此光故、云無癡所生光。此光亦滅愚癡之罪。然者雖無智念仏者、照彼智慧光攝取故、即滅愚癡、與智者無有勝劣。又如此光可知。如是而雖有十二光名、取要在斯⁽¹⁴⁾

と三光を説いている。この三光は阿弥陀仏の法蔵菩薩であつた時の本願成就のための修行の内実に伴う特性を光明の特性としている。清浄光は人間の本性とも言える物質に対する貪欲と性的欲望に対応してその二貪欲を断除して清浄にするものである。その効力は無貪にして善根の修行によって生じた光である。阿弥陀仏の名号を至心専念（唱える）することによってこの清浄光に照らし出され、そのことによつて二貪欲の不浄が除かれ、無戒破戒の罪が滅し、無貪善根の身となり、持戒清浄の人と等しくなるというのである。

次の歡喜光については、菩薩時の無瞋善根によつて生じる光で、専修念仏によつてこの光に触れるものは瞋恚（怒り腹立ち）の罪を滅し、六波羅蜜の忍辱波羅蜜を實踐するものと同じとなるというのである。

さらに智慧光については、無癡善根によつて生じた光であり、この智慧光に触れる者は無智にして念仏する者といえども愚癡が滅せられ、智者と同じとなると述べている。

この清浄光・歡喜光・智慧光はいずれも世俗における相対的な差

次無礙光者、如此界日月燈燭等光者、雖一重、隔物者其光無徹。若彼仏光被碍物者、此界衆生、設雖念仏不可得蒙其光攝。其故彼極樂世界與此娑婆世界之間、隔十萬億三千大千世界。其一々三千大千世界各有四重鐵圍山。謂先有圍一四天下之鐵圍山、高齋須彌山。次有圍小千界之鐵圍山、高至第六天。次有圍中千界之鐵圍山、高至色界初禪。次有圍大千界之鐵圍山、高至第二禪。然則若非無碍光者、一世界尚不可徹。何況十萬億世界耶。然彼仏光明徹照彼此若于大小諸山、攝取此界念仏衆生無有障碍。照攝餘十方世界事亦如是。故云無碍光。⁽⁹⁾

十二光仏の内、法然は無量光・無辺光・無碍光と清浄光・歡喜光・智慧光の六光について解説している。阿弥陀仏を無量寿仏・無量光仏といい、その功德の中でも寿命の無量であることを本とし、光明が優れていることに力点を置き、無量光については『観無量寿経』の真身観文の「無量寿仏有八万四千相一々相各 有八万四千隨形好復有八万四千光明一々光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨光明」を引き、光明が無量であつて算数の及ばざるものであることを論じている。そして遍照十方世界であることが無辺光であること、すなわち照らすところ辺際なきことを述べ、さらに光の障碍となるものがないことを我々の経験世界における太陽や月の光、さらには燈燭等光の物によって遮られるのに比して遮られるものでないことを無碍光であると論じている。

光明が無量であることの意味については『三部経大意』には第九真身観ニ、光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨ト云ヘル文有

リ。濟度衆生ノ願ハ平等ニシテ差別有ル事ナケレトモ縁無キ衆生ハ利益ヲカウフル事アタハズ、此故ニ弥陀善逝平等慈悲ニ催サレテ、十方世界ニ遍ク照シテ、一切衆生悉ク縁ヲ結ハシメンカタメニ、光明無量ノ願ヲ立給ヘリ。第十二ノ願是也⁽¹⁰⁾

とあり、第十二願の光明無量の願意が平等の慈悲に基づくものであつて、一切の衆生に阿弥陀仏との縁を結ばしめんがためであるとす。さらに『三部経大意』は続けて

然ハ光明無量ノ願ハ、横二十方ノ衆生ヲ広ク攝取セムカ為也⁽¹¹⁾

と述べて、空間的広がりのおいて、いわゆるいずこの衆生であつてもすべてを救わんとする慈悲の現れであるにとらえている。ここでは光明を、阿弥陀仏の慈悲を、願意との関わりから見ていることが窺える。

こうした空間的にすべての衆生を救済しようとする側面に対して、時間的にいかなるとききの衆生であつても、すなわちいかなる時代の経過を経てもすべての衆生を救済しようとする願意のもとに、寿命無量の願が建てられる。そのことを同じく『三部経大意』に

又此願久シテ衆生ヲ濟度セムカ為ニ、寿命無量ノ願ヲ立給ヘリ。第十三願是也⁽¹²⁾

と述べ第十三願を解釈している。いかなる所にいるものであつても、いつの時代に生きるものであつても、等しく阿弥陀仏の救済の縁に会えるようにという慈悲の精神が願意であると受け止めている。

無量な光明は遮られることのない無碍光であり、その光は無辺光として空間的にすべてにわたつて衆生を照らし続けている光明であ

し⁽⁴⁾とあり、念仏相続によって三心が具足され、そのことよって往生を確信し踊躍歡喜の心が生じ、

いけば念仏の功つもり、しなば往生うたがわず、とてもかくても、此身にはおもひわづらふ事ぞなきと思ぬれば死生ともにわずらいなし⁽⁵⁾

と言わしめている。現生においてすでに往生したる心地になることはまさに阿弥陀仏に見まえる体験を通してのことである。往生は自らの力においてなされるのではなく阿弥陀仏の力によるものであり、その阿弥陀仏の救済の働きは光明撰取においてなされるのである。光明は阿弥陀仏の慈悲の働きの現れであり、法然自身往生の心境に至ったことから、阿弥陀仏の光明に照らされていたことを物語っていることになる。

また法然自らが記した『三昧発得記』には、口称念仏の相続のうち自然に三昧発得し、その宗教的深まりの中で三尊が現じたことを記している⁽⁶⁾。さらに『法然上人御夢想記』には夢の中で善導と対面している⁽⁷⁾。それらの描写を見る限り、明らかに光明に浴するといった宗教体験をもっていたと考えられる。こうした体験を通して、口称念仏による浄土往生の確信を深め、現実の生において「死生ともにわずらいなし」と言わせ、また口称念仏による往生を「一念に一度の往生をあておき」といった詞によって現している。さらに

『御臨終日記』には

正臨終時、懸慈覚大師九條袈裟、頭北面西、誦光明遍照十方世界

念仏衆生撰取不捨、如眠命終⁽⁸⁾

とある。こうしたことから法然にとって光明に浴するといった体験は大きな意味をもっており、阿弥陀仏の本願の聖意を心身を通して受け止める重要な事項である。この阿弥陀仏の光明をいかにとらえていたかを論じようとするのがこの小論の意図するところである。

二、阿弥陀仏の光明の功德

(その超勝性と世俗の相対的価値の無化作用等)

阿弥陀仏の光明の超勝性については阿弥陀仏の異名である十二光仏の説明の中に詳述される。すなわち『逆修説法』三七日において次のように述べている。

阿弥陀者、是天竺梵語也。此翻日無量寿仏、又日無量光仏。又日無辺光仏無碍光仏無対光仏炎王光仏清浄光仏歡喜光仏智慧光仏断光仏難思光仏無称光仏超日月光仏。是知名号中備光明與壽命之二義云事。彼阿弥陀仏一功德中壽命為本、而光明勝故也。然者亦可奉讚光明壽命二德先明光明功德者、初無量光者、經云。無量寿仏有八万四千相一々相各有八万四千隨形好復有八万四千光明一々光明遍照十方世界念仏衆生撰取不捨。云々。恵心勘之云。一々相中、各具七百五俱。桁六百萬光明、熾燃赫突。従一相所出光明如斯、況八万四千相乎。誠非算数所及。故云無量光。

次無辺光者、彼仏光明其数如此、非無量、所照亦無有邊際、故云無辺光

法然上人の光明観

神谷正義

一、はじめに

法然上人(一一三三～一二二二・以下敬称略)は建久九年、九条兼実の懇請を受けて自らの浄土教思想を体系付けた『選択本願念仏集』(以下『選択集』と略)を撰述している。その撰述の背景には法然自らの深い宗教体験がある。弟子の聖光房に語った

およそ仏教多しと雖も詮ずるところ戒定慧の三学をば過ぎず、(中略)しかるに我がこの身は戒行においても一戒をもたもたず、禅定において一もこれを得ず、智慧において断惑証果の正智を得ず、(中略)悲しきかな、悲しきかな、いかがせん、いかがせん、予がごとき者すでに戒定慧の三学の器ものにあらず⁽¹⁾

と述べられるように、真摯に仏道を修めていく中で自らの機根を見つめ、三学非器の自覚のうえに立って、こうした者も救われる道を求めて阿弥陀仏の救いに出会い、念仏の一行に徹していくことにな

る。念仏相続の中において阿弥陀仏の光明に照らし出されることによつて罪悪生死の凡夫であることの自覚を深めていく。三学非器にして且つ罪悪生死の凡夫が浄土に往生できる道を体系的に示したものが『選択集』である。選択本願念仏説は浄土門帰入後、東大寺での三部経講説、中原帥秀への逆修説法を経て形成されたとする。その間、念仏による信仰は深められ、具体的な生活の面において

一食ノアヒタニ三度ハカリトナエムハ、ヨキ相続ニテアルヘシ⁽²⁾と述べられる。このことばは自ら体験したものの言える詞である。その念仏の相続によつて得られた境地については「禅勝房に示された詞」に見ることができる。三心具足について述べる中で

心念口称ニモノウカラス、ステニ往生シタルココチシテ、タユマサルモノハ、自然ニ三心ヲ具足スルナリ⁽³⁾

といい、念仏相続が往生の確信へと進み三心が自然に具足されることを明かしている。さらに三心が自然に具足された心境とは

踊躍歡喜の心おこりたらん人は自然に三心は具足したりと知るべ